

sopādanaviññāna

佐々木容道

小論で私は、初期唯識思想に於ける sopādana-viññāna (有取識) と同じき察¹⁾ sopādana-viññāna から ādanaviññāna と ālaya-viññāna への発展を示すと思われる諸要素を提示しようとした。そこで最初に、「俱舍論」の称友註に引用される阿含經典を見るとき、そこには (pañca bija jātaṇṭhi bhikkhavaṇṇa sopādanasya viññānasya itad adhivacanam / pīthivīdhatu itī cataspiṇṇa viññānasthitinam etad adhivacanam) と、sopādana-viññāna が四識住と共に記されている。これに相当する經典は、相応部と雜阿含の内に見い出されるが、(ime cattaro āhārā taṇhānidāna taṇhasamudayā.....) という十二支縁起に関する教理に基づく、前者の場合、(seyyathāpi bhikkhave pathaviḍātu evaṃ catasso viññāpīthitīyo dāṭṭhabhā / seyyathāpi bhikkhave āpōdhātu evaṃ nandirāgo dāṭṭhabbo / seyyathāpi bhikkhave pañcabija jātaṇṭhi evaṃ viññānaṃ sātāraṇa dāṭṭhabbam) と、sāhāra 「有食」という語が用いられている。とは言え、「俱舍論」中の賢聖品や世間品には、右の經典に基づく sopādanaviññāna の叙述があり、「阿毘達磨発智論」にも、右の經典を踏まえ、「根者喩有取識。地界者喩四識住。如世尊說。五種子者。顯有取識。地界者。顯四識住。……諸阿羅漢。於四識住中。無牽後有有取之識。」と、有取識が説かれている。これらの記述から、

ら、sopādana なる識は、四識住と共に在って後有を牽く否定されるべき存在である事が判る。

ところで、この有取識が「瑜伽師地論」中の摂事分に記される事は注目に値する。と言うのは、元の雜阿含の構成に従うというこの摂事分は、長い論述にも関わらず、アローヤ識などに関する発展した識論を含まず、従って、摂事分中の識論の考察は、唯識思想の新しい要素の解明に役立つと思うからである。そこで摂事分を見るとき、sopādanaviññāna (len pa dan bhas pa'i nman par śes pa) と (nman par śes pa'i gnaś bzi po nman kyi he bar len pa dan bhas pa'i nman par śes pa span ba'i phiyir.....) (len pa dan bhas pa'i nman par śes pa dan / nman par śes pa'i gnaś bzi dan.....) など、四識住と共に存する放棄すべき存在として述べられている。更に摂事分には、「有取」という語は用いられないものの、右の經典に依拠した、四識住と共なる識に関する論述が為されている。その例を次に二つ挙げる。(a) (non moṃs pa'i sa bon dan idan pa'i nman par śes pa ni rgyu'o // nman par śes pa'i gnaś bzi zin dan 'dra ba dan / dgra' ba dan 'dod chags des nman par śes pa skye ba de dan der ḥin mshams sbyor ba'i phiyir nman par 'byed pa ni rkyen yin no //) 「煩惱の種子を具有する識が因である。如の如き四識住と、この喜食によつて、識があるこれの生[所]に結生するように愛着する事とが縁である。」(b) (nman par śes pa kun nas ḥon moṃs pa can du 'gyur te / nman par śes pa'i gnaś nman la gnaś nas phiyi ma la yan srid par skye ba'i sa bon gyi tshul gyis skye bar 'gyur ro // skyes nas yan srid par skye ba'i skye ba la sogs pa'i sduḡ bśnal mñon

par 'grub par 'gyur te / 「識は汚染され、〔四〕識住に住して、
未来の後有の種子の仕方て生ず。生じてから、後者の生などの苦が
生じる事になる。」

この内 (a) で、上述の經典の「種子の如き識」が「種子を具有する識」と言い替えられている事は、「顯揚聖教論」で、有取識と阿頼耶識が「云何知有此識。如薄伽梵說。……又說如五種子。此則名為有取之識。此言顯有一切種子阿頼耶識。」と説明されている事と共に、種子に関する教理に発展のあった事を示す。ともあれ、これらの資料から、有取識と呼びうる識が、種子を具有して後有を可能にする汚れた識である事が判る。更にこの摂事分では、四食中の識食の識が、'di lla ste kham gyis za ba dan bde ba myon' bar 'gyur bai reg pa zag pa dan bcas ba dan yid la sems pa dan dhan poi 'byun ba chen po len par byed pa'i rnam par ses pa'o // 「即ち、段食と、樂を感受する有漏の触と、意思と、感覺器官の大種を執受する識〔が四〕である。」(tshe 'di la lus dan zas rnam la rnam pa gsum gi sgo nas las dan ñon mois pa rgyas par byas nas tshe 'di la yan srid par sbye ba la phan 'dogs pa'i phyir rnam par ses pa las dan ñon mois par ñe bar 'gro ba dan / len pa dan bcas par byed de /) 「この世で、身体と諸食中の三種（段食・触食・意思食）を手段として、業と煩惱は増大し、後有に資益する様に、〔衆生は〕この世で識を、業と煩惱とが付随し、取を伴った様にする。」と説明される。即ち識は、有色根を執受する (upādāna する) と共に、有取 (sopādāna) になって後有に資益するものと考えられている。ところで、「アビダルマサムムチャヤ」には、十二支縁起に関連して (upādānaṃ kiṃkarmakam /

sopādanavijñāna (佐々木)

punarbhvādānāya sopādanam ca sattvānāṃ vijñānaṃ karoti,
pratyayaś ca bhavati bhavasya /) 右の摂事分の記述に類似した表現が用いられており、後有 (punarbhava) を取る (ādāna する) 有取識の存在した事を推測させる。以上の事から、摂事分に於いて有取識は、有色根を upādāna し、後有を可能にし、種子を具有する汚れた識となり、更にこの識は、「アビダルマサムムチャヤ」から推測される様な、後有を ādāna するものになって、upādāna と ādāna の働きをする sopādanavijñāna が形成されたと思われる。

とすれば、機能的に sopādanavijñāna は ādanavijñāna や alaya-vijñāna に類似する事になり、名称的には ādanavijñāna に近くなる。従って、sopādanavijñāna はまた ādanavijñāna に発展し、その後、愛着という意味の (ālaya) が識名に用いられたと考える事ができる。ただ「解深密經」や「撰大乘論」などから判る様に、阿陀那識や阿頼耶識は、六識とは異り六識の依り所となる、執着の働きを伴わない識である。であるから、阿頼耶識や阿陀那識の形成には、有取識に関する教理の他に、滅尽定など無意識状態についての考察が関与し、その結果、両識は六識と異なるものと考えられ、更に「愛着、執着」の働きがクリシュタマナス（末那識）に移行し、不可知な upāti として現象し種子を具有する無覆無記なる阿頼耶識が形成されたのではないかと思う。以上の点から私は、sopādanavijñāna に関する教理が ādanavijñāna や alayavijñāna の形成に大きな役割を果たしたと考える。

(註略)

(京都大学大学院)